

中所宜夫「中尊」

ちゅうぞん

石牟礼道子「花を奉る」(朗読) 竹崎利信

(能楽らいぶ)

シテ 中所宜夫

ワキ 安田登

ミニ対談… 中所宜夫 × 浜垣誠司

三月二日(日) 午後六時開演 (午後五時半開場)

法然院 本堂にて (京都市左京区鹿ヶ谷)

「ハ」において われらなお 地上にひらく一輪の花の力を念じて 合掌す

ガハク作「はすのはな」
(当日は本作を含む連作を展示します)

参加費: 2000円 経費を除き被災地の活動に寄付します

ご希望の方は アートステージ567 まで電話でご予約下さい (TEL 075-256-3759 :12時~18時, 月曜休)

「イーハトーブ・プロジェクト in 京都」とは

東日本大震災から間もないある日、京都在住の宮沢賢治愛好者や賢治に所縁のある者が、たまたま思いを語り合う機会がありました。被災地から離れた京都にいて、いったい自分たちに何ができるのか。それまで衝撃に打ちのめされながら、ただ「オロオロアルキ…」という日々を送っていた私たちでしたが、考えあぐねているよりもまずは賢治の作品を囲んで、人が集まれる場を作ろうということになり、とりあえず町家二階のイベントスペースで開いたのが、第1回の「イーハトーブ・プロジェクト in 京都」でした。

それ以来、私たちはこのプロジェクトとして5回の公演を行いました。内容は、賢治作品の様々な朗読や語り、賢治が作った歌曲を集めたコンサート、そして今回もお招きする中所宜夫氏による創作能などでした。幸いにも、毎回たくさんの皆さんにお越しいただき、当日お寄せ下さった参加費から必要経費を除いた全額は、義援金として被災地に届けてまいりました。

生前の賢治は、自然や人間や全ての生命について考えつづけ、また多くの自然災害にも直面した人でした。それもあってか、震災以降さまざまなところで、宮沢賢治の作品や思想が注目を集め、ちょっとした賢治ブームにもなっています。しかし、以前から賢治に親しんできた者としては、これを一時の流行に終わらせるには忍びません。彼が遺した作品、彼が抱えていた悩みを、今こそ地道に辿りなおすことによって、これから先も被災地とともに歩む長い道のりの糧を、多くの皆様とともに汲みとって行きたいと考えています。

『中尊』～福島への鎮魂の能～

さて今回は、第2回公演において賢治の童話に基づいた現代能『光の素足』を演じていただいた中所宜夫氏を、再び法然院にお招きして、氏の最新作である能『中尊』を、「能楽らいぶ」形式で上演していただきます。実はこの『中尊』は、先の福島第一原子力発電所の事故を潜在的なテーマとして中所氏が書き下ろした、現代の大いなる鎮魂の曲なのです。

思えば能とは、観阿弥や世阿弥が生きた戦乱の時代から、無念の最期を遂げた人々の魂を鎮め、その死をともに悼むという役割を帯びた芸能でした。これまで中所氏は、このような能の伝統を追究する一方で、宮沢賢治や中原中也などの作品をもとに、能を現代に息づかせる意欲的な創作も続けてこられました。そこへ先の震災と原発事故に接するに及び、氏はこの前代未聞の状況において、能楽師としていったい何ができるのかという課題を、ずっとご自身に問い続けられたのです。

その間に中所氏は、石牟礼道子氏が福島原発事故に捧げた詩「花を奉る」に出会い、また福島からリアルタイムで発信を続ける詩人の和合亮一氏とコラボレーションを行い、さらに東北の地を浄土に転じようとして滅んだ奥州藤原氏が残し、800年ぶりに現代に甦った「中尊寺蓮」とも出会われました。その過程において、新しい能の一曲『中尊』が、おのずと形を現わすこととなったのです。

…新潟阿賀野で生まれ、親を水銀の毒で亡くした一人の女性が、故あって福島で幼な子と暮らしていた。そこに原発事故が起こり、彼女は必死に子の手を引いて、岩手へと逃げ延びる。やがて月日が経ち、成長した子は福島のために働くと言って去り、一人残された女性は孤独に沈みつつ、中尊寺蓮の咲く屋敷に身を寄せていた。するとそこに、旅の詩人が通りかかる…。

当日は、時を越えて甦る東北の歴史と、そこに捧げられる深い「祈り」を、ご堪能下さい。

「イーハトーブ・プロジェクト in 京都」実行委員会 浜垣 誠司

出演者



中所 宜夫 (なかしょ のぶお) 能楽師。観世流シテ方。観世九阜会所属。重要無形文化財総合指定保持者。

昭和33年名古屋生まれ。東京都あきる野市在住。謡曲を趣味とする父の影響により、子供の頃から能に親しむ。一橋大学進学後のクラブ活動を通して能を志し、在学中に矢来観世家当主観世喜之師の内弟子となる。昭和63年独立。平成9年『道成寺』、17年『安宅』、25年『翁』を抜く。

「中所宜夫能の会」を主宰し、古典作品の演能以外にも、能楽堂以外の空間を活かした小規模公演「能楽らいぶ」や、他分野との共演や新しい作品の創作にも取り組み、独自の視点から能の原点を追求している。また、能楽についての講演や、体験講座などの活動も多い。24年の「第2回イーハトーブ・プロジェクト in 京都」では、宮沢賢治の世界観を具現化した能『光の素足』を独演した。今回の能『中尊』は、石牟礼道子の詩「花を奉る」をもとにしており、「賢治の精神を受け継ぐ石牟礼道子」という視点から、“東北の今”を描いた作品である。



安田 登 (やすだ のぼる) 下掛宝生流ワキ方能楽師。ワキ方として舞台を務めるかわら、さまざまな形で能や身体技法のワークショップや、語りの公演なども行なっている。また、東京・広尾の東江寺で、学びの場である寺子屋も開いている。

著書に、『疲れにくい体をつくる「和」の身体作法』(祥伝社黄金文庫)、『異界を旅する能』(ちくま文庫)、『身体感覚で「論語」を読みなおす。』(春秋社)、『からだで作る〈芸〉の思想』(前田英樹氏との対談大修館書店)、『あわいの力』(ミシマ社)、『本当はこんなに面白い「おくのほそ道」』(実業之日本社)ほか。

会場



東山の懐に抱かれた**法然院**は、鎌倉時代に法然上人が弟子たちと念仏を修した草庵に由来します。本尊の阿弥陀如来坐像を安置する**本堂**は、通常は非公開ですが、今回は貫主様の御厚意により、使用させていただけることになりました。

アクセス:

阪急四条河原町駅より、市バス32系統・銀閣寺前行きに乗車、「南田町」バス停で下車、山に向かって徒歩5分。

または、JR京都駅・京阪三条駅より、市バス5系統・岩倉行きに乗車、「浄土寺」バス停で下車、山に向かって徒歩10分。

会場の定員には限りがあります。必ず事前に下記に電話をしてご予約下さい。

075-256-3759 (アートステージ567: 12時～18時, 月曜休)

主催: 「イーハトーブ・プロジェクト in 京都」実行委員会 / 協力: 法然院

